

【旧約聖書日課】出エジプト記 16章4～16節

4主はモーセに言われた。

「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。5ただし、六日目に家に持ち帰ったものを整えれば、毎日集める分の二倍になっている。」

6モーセとアロンはすべてのイスラエルの人々に向かって言った。

「夕暮れに、あなたたちは、主があなたたちをエジプトの国から導き出されたことを知り、7朝に、主の栄光を見る。あなたたちが主に向かって不平を述べるのを主が聞かれたからだ。我々が何者なので、我々に向かって不平を述べるのか。」

8モーセは更に言った。

「主は夕暮れに、あなたたちに肉を与えて食べさせ、朝にパンを与えて満腹にさせられる。主は、あなたたちが主に向かって述べた不平を、聞かれたからだ。一体、我々は何者なのか。あなたたちは我々に向かってではなく、実は、主に向かって不平を述べているのだ。」

9モーセがアロンに、「あなたはイスラエルの人々の共同体全体に向かって、主があなたたちの不平を聞かれたから、主の前に集まれと命じなさい」と言うと、10アロンはイスラエルの人々の共同体全体にそのことを命じた。彼らが荒れ野の方を見ると、見よ、主の栄光が雲の中に現れた。11主はモーセに仰せになった。

12「わたしは、イスラエルの人々の不平を聞いた。彼らに伝えるがよい。『あなたたちは夕暮れには肉を食べ、朝にはパンを食べて満腹する。あなたたちはこうして、わたしがあなたたちの神、主であることを知るようになる』と。」

13夕方になると、うずらが飛んで来て、宿営を覆い、朝には宿営の周りに露が降りた。14この降りた露が蒸発すると、見よ、荒れ野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた。15イスラエルの人々はそれを見て、これは一体何だろうと、口々に言った。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。モーセは彼らに言った。「これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである。16主が命じられたことは次のことである。『あなたたちはそれぞれ必要な分、つまり一人当たり一オメルを集めよ。それぞれ自分の天幕にいる家族の数に応じて取るがよい。』」

【福音書日課】ヨハネによる福音書 6章34～40節

34そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言うとき、³⁵イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。³⁶しかし、前にも言ったように、あなたがたはわたしを見ているのに、信じない。³⁷父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る。わたしのもとに来る人を、わたしは決して追いつきません。³⁸わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。³⁹わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。⁴⁰わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」

「パンをください」【こども説教のために】

イースターにご復活なさった主イエスは、弟子たちの前に現れられると、彼らと食事をなさいました。十字架につけられる前の晩まで、毎日食事を共にして下さっていた主イエスが、ご復活されてからも、弟子たちの食卓に現れてくださり、食事を共にして下さったのです。ご復活された主イエスは、弟子たちの前でパンを裂いて分けてくださったり、弟子たちの差し出す焼き魚をお食べになられたりしました。

弟子たちは、そのとき、きっと思い出していたのでしょうか。かつて主イエスが、五千人もの人を前にして、たった五つのパンと二匹の魚だけしかなかったのに、それを皆に分け与えてくださり、満腹させてくださったことを。そのとき、主イエスは、皆に食べさせたい、とおっしゃいました。弟子たちは、「五つのパンと二匹の魚しかないのに、五千人に食べさせるのは無理です」と言いましたが、主イエスは譲りませんでした。そのパンと魚を手にとって、感謝の祈りを唱えられると、五千人の人たちに分け与えられたのです。皆、満腹するだけのパンと魚を与えられました。

その人たちは、主イエスの後を追って来ました。「わたしたちにパンをください」と願いました。昔、モーセが荒野で天からのパン、マナを人々に食べさせたように、自分たちにもしてほしいと願ったのです。

ご復活された主イエスと食事を共にした弟子たちは、多くの人とパンを分け合いました。豊かな者が惜しみなくパンを分け与えました。けれども、それだけでなく、もっと大切なパンも分け与え始めました。「わたしが命のパン」とおっしゃった主イエスのことです。「主イエスこそが天から与えられた命のパンです」と、人々に主イエスを分け与える「教会」が始まったのです。

「わたしが命のパン」

イースターの祝いの礼拝から始めた「一部制」の主日礼拝で、新たに子どもたちと共に「主の祈り」を唱えるようにしています。礼拝中に二度、「主の祈り」を唱えることとなりますが、前半で退堂して礼拝を終えることにしている子どもたちと、ぜひ一緒に唱えたいと考えました。主イエスから与えられた共同の祈りとして「主の祈り」を子どもたちにしっかりと受け渡したいからです。従来の位置での「主の祈り」をしないという選択肢もありましたが、そうはしていません。伝統的な教会で、礼拝中の「献金・奉獻讃美」に続く「主の祈り」は、「聖餐」と結びついて大切にされてきたからです。主イエスの食卓にあずかるに際して、主イエスがお教えくださった「主の祈り」を唱え、中でも「日ごとの糧を今日もお与えください」（共通口語訳）と願って、パンと杯にあずかるものとされてきたのです。

現代社会に生きるわたしたちにとって、「日ごとの糧」、毎日の食事は、それほど深刻な問題ではないかもしれませんが、たしかに、わたしたちの周囲にも十分に毎日の食事を得られない人はいます。世界を見渡せば、食糧の配分に偏りがあるのは確かです。それでもそれほど深刻に考えないでいられるのは、少しの愛をもって知恵を絞れば、すべての人に最低限の食事を行き渡らせることはできると、楽観しているからではないでしょうか。そして、このことに今さら教会やキリスト者が責任を引き受けてしゃしゃり出る必要もないと考えているところもあるのかもしれません。教会は、食べ物のことのような物質的なことよりも、もっと心の問題など霊的なことに取り組むべきだと。現代人にとって主イエスの教えは、何よりも精神的なこと、心の内奥のことに触れるものだからこそ、意義があるのだ、と。

しかし、弟子たちにとっては、そうではなかったでしょう。ご復活の主イエスが現れられたとき、弟子たちは、その主イエスと食事を共にしたのだといいます。それによって、彼らは目の前の人が本当に主イエスだと分かったというのです。彼らにとって主イエスの印象は、事程左様に食事と結びついていました。

たしかに、食事のあり方、その振る舞いに、わたしたちの人生の生き方が映し出されるのです。何を食べるのか、誰と共に食べるのか、どのように食べるのか。そのようなところに、人の生き方が現れるのでしょうか。

ご復活の主イエスを記念するわたしたちは、主イエスの食事の振る舞いを思い起こすように促されています。「わたしが命のパン」とおっしゃられた主イエスを思い出すのです。この主イエスは、「このパンを食べなさい」と言われる。ご自分を「パン」として差し出されて、ご自分のことを「食べなさい」とおっしゃる。それは、主イエスの生き方そのものではないでしょうか。

パンは天から！

今週、わたしどもは、久しぶりに結婚式に出席する予定です。親族の結婚式で、教会ではなく結婚式場で行われます。披露宴、つまり祝いの宴もあります。ただし、披露宴は同じ日に二度、入れ替え制をするのだそうです。式場の方針で人数制限があるためです。全員が一堂に会するのは、儀式のときだけです。さぞかし大変な一日になることでしょうか、結婚する二人は、そのようにしても迎えたい方々が多くあるのだそうです。

主イエスも、ご自分の食卓にどうしても迎えたい者たちが少なくなかったのです。五千人の者と共に食事をされても、満足されなかったのでしょうか。ご自分の命を差し出しても、すべての者を迎え入れたいとお考えだったのに違いありません。ご復活して現れられた主イエスのお姿を見て、弟子たちが受けとめていたのは、主イエスのそのような生き方そのものだったのではないのでしょうか。

「**わたしが命のパンである**」と主イエスは言われます。「わたしは天から降ってきたパンである」(41 節) と言うのです。もちろん、主イエスは、ご自身のことを「天上クラスの特別なパン」であると主張なさっているわけではないでしょう。昔、モーセに導かれた先祖たちは、荒れ野で「天からのパン」を与えられたのです。それは、モーセが与えたのではなく、神がお与えくださったものです。「天からのパン」とは、そういうことです。主イエスは「天から降ってきたパン」なのです。天の御父が、地上の者にお与えくださり、それによって命を得るようになされたものです。「命のパン」です。

そのパンは、あなたに与えられたものです。どなたかが、与えてくださったのです。その方の命と引き換えに、パンは、あなたに与えられている。あなたが命を得るために。それを受け取らなければ、命を保てない。だから、わたしから取って食べてください、これがあなたの「命のパン」です。

パンを食べるたびに、食事を共にするたびに、主イエスは、そのような思いをもって、そこにいる者たちとパンを分かち合い、その時間を共に過ごし、ご自身の命の営みを分け与えられたのです。そして、その命の営みが十字架の上で途絶えてしまうことは、ありませんでした。かつて主イエスと食事を共にした弟子たちは、自分たちの食事の営みにご復活の主イエスを見始めていたのです。主イエスが自ら差し出し、分け与えてくださった「命のパン」の営みは、今や自分たちの食事の営みの中で続いている、と。

「わたしが命のパンです」。そう言って自らを差し出してくださった主イエスは、わたしたちの中にも現れてくださっています。「わたしも命のパンです」と、わたしたちが自分自身を差し出す者として生き始めるように、ご復活の主イエスは、今もここに現れて、自らを差し出してくださっているのです。